

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04463

研究課題名(和文) 社交不安症におけるビデオフィードバックの妨害要因と効果向上に関する研究

研究課題名(英文) Research on Interfering Factors and Effectiveness of Video Feedback in Social Anxiety Disorder

研究代表者

城月 健太郎 (Shirotsuki, Kentaro)

武蔵野大学・人間科学部・教授

研究者番号：50582714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、社交不安症におけるビデオフィードバックの妨害要因について検討を行い、その要因の変容と認知行動療法の効果を検討することであった。基礎的な研究として、複数の質問紙調査を行った。まず、大学生を対象とした調査により、解釈バイアスや自己注目が社交不安の維持に関与していることを明らかにした。また、社交不安症患者を対象とした調査によって、ビデオ映像に対するネガティブな解釈が社交不安症状の維持に関与することを示した。また、ビデオフィードバックの集中的な実施による認知行動療法プログラムによって、社交不安症状が改善することを明らかにした。これらを通して、ビデオ映像に関する自己の機能を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、自己のビデオ映像に対するネガティブ・ポジティブな認知と社交不安の関連性が明らかにされた。具体的には、注意や解釈などの認知バイアスの機能を示し、社交不安症に関する認知行動的要因の影響を明らかにすることで、臨床心理学の発展に貢献した。また、認知行動療法プログラムの実践によって、社交不安症の改善に関する知見を提供し、効果的な心理療法の提供に寄与する知見を示すことができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the factors that interfere with video feedback in social anxiety disorder, and to examine the changes in these factors and the effects of cognitive-behavioral therapy. As a basic study, we conducted multiple questionnaire surveys. First, a survey of university students revealed that interpretation bias and self-attention are involved in maintaining social anxiety. A survey of patients with social anxiety disorder also showed that negative interpretations of video feedback effected to the maintenance of social anxiety symptoms. It was also found that a cognitive-behavioral therapy program with intensive video feedback sessions improved social anxiety symptoms. Through these, it was clarified my function regarding video images.

研究分野：臨床心理学

キーワード：社交不安症 認知行動療法 不安 認知バイアス ビデオフィードバック

1. 研究開始当初の背景

ビデオフィードバックとは、自己のパフォーマンス場면을視聴することで、主観的評価と客観的評価のギャップを理解し、ネガティブな自己評価を修正する技法である。社交不安症 (Social Anxiety Disorder; SAD) は、他者からの否定的評価の恐れを特徴とする精神疾患である。SAD の臨床心理学研究では、認知モデル (Clark & Wells, 1995) と認知行動モデル (Rapee & Heimberg, 1997; Hofmann & Otto, 2008) をもとに国内外で基礎・応用研究 (認知行動療法) が進展している。ビデオフィードバックは、SAD の介入プログラム研究において、認知的再体制化やエクスポージャーに加え、主たる構成要素として実施されている。SAD におけるビデオフィードバックは認知行動療法プログラムの主要な構成要素として効果が示されている (Shirotzaki et al., 2014)。また、城月他 (2011) は、ビデオ映像を見る際に、客観的に観察することが効果的であると報告している。ビデオ映像を観察するのみでは、自己のネガティブな側面に注意が向き、低い自己評価の維持・増悪する可能性があることも指摘した。

2. 研究の目的 ビデオフィードバックは、自己のビデオ映像を視聴することが負担となるが、その際の具体的な認知の内容については、国内外の研究でも十分に解明されていない。SAD 患者の実際の認知を特定し、SAD 症状との関係を明確化することによって、従来の治療で生じる負担を軽減することに寄与することができると考えられる。また、ビデオフィードバックは、認知的介入を合わせて用いることが効果を十分に引き出す。しかし、国内外においては、実践的な経験をもとに認知的介入が普及しているが、治療の妨害要因の明確化がなされていない。本研究では、ビデオ映像に対する認知を介入ターゲットとし、SAD の効果的な治療を提供かどうか検討する。

3. 研究の方法 および 4. 研究成果

研究1 VFの阻害要因を検討するために、城月 (2013) は The Video Interpretation Questionnaire (以下 VIQ とする) を開発した。本研究はビデオ映像の自己に対するネガティブ、またはポジティブな解釈について測定する尺度である、VIQ の信頼性・妥当性の再検討を目的とした。

対象 私立大学の学生 573 名に実施した。調査項目のうち、ひとつの尺度における回答の欠損が 10% 以内のものに対しては平均代入法を使用した。その結果、有効回答である 509 名 (男性 142 名、女性 343 名、無回答 6 名、不明 18 名; 平均年齢 18.3 歳, SD = 3.64) を対象とした

調査内容

(1) Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版 (朝倉・井上・佐々木 2002; 以下 LSAS-J とする)

(2) 日本版 Fear of Negative Evaluation Scale 短縮版 (笹川他, 2004; 以下 SFNE)

(3) Speech Estimation Scale (城月・笹川・野村, 2009; 以下 SES とする)

(4) Fear of Positive Evaluation Scale 日本語版 (前田・関口・堀内・Weeks・坂野, 2015; 以下 FPES-J とする)

(5) Self-rating Depression Scale (福田・小林, 1973; 以下 SDS とする)

(6) The Video Interpretation Questionnaire (城月, 2013; 以下 VIQ とする)

倫理的配慮

本研究は武蔵野大学人間科学部研究倫理委員会において、手続きの承認を得た上で実施された (承認番号 29011)。調査対象者に対し、調査目的、調査への協力・拒否の自由、個人情報保護などについて書面および口頭で説明し、同意が得られたものに回答を求めた。

結果と考察

VIQ-N と VIQ-P の 5 項目を因子として設定したモデル 1 について確認的因子分析を行った。母数の推定は最尤推定法によって行った。モデル適合度指標は、モデル 1 が  $\chi^2=168.433$ ,  $df=34$ ,  $p<.001$ ,  $GFI=.941$ ,  $AGFI=.905$ ,  $CFI=.948$ ,  $RAMSEA=.088$  であった。また各因子に対するパス係数について、全ての値が 1% 水準で有意であり、受容可能な適合度を示した。VIQ の基準関連妥当性について検討するために、VIQ-N、VIQ-P と LSAS-J-F、LSAS-J-A、LSAS-J、SFNE、SES、FPES-J、RSES-J との Pearson の積率相関係数を算出した。これらの結果を Table 1 に示す。

Table 1 各尺度と VIQ との相関

N=509

	LSAS-J-F	LSAS-J-A	LSAS-J	SFNE	SES	FPES	SDS	VIQ-N
LSAS-J-A	.77***							
LSAS-J	.94***	.94***						
SFNE	.46***	.29***	.40***					
SES	.54***	.45***	.53***	.34***				
FPES	.40***	.36***	.40***	.34***	.39***			
SDS	.35***	.30***	.34***	.39***	.39***	.38***		

VIQ-N	.46***	.35***	.43***	.42***	.49***	.52***	.42***
VIQ-P	-.23***	-.19***	-.22***	-.28***	-.19***	-.22***	-.32***

\*\*\* $p < .001$

## 研究2 社交不安と注意バイアス及び解釈バイアスの関係性についての検討

社交不安の維持に関して、これまで多くの研究が行われてきている。その中でも、Clark & Wells (1995) や Rapee & Heimberg (1997) は、社交不安の認知モデルを検討し、対人情報処理におけるバイアスが社交不安の生起や維持要因として機能していることを理論化している。本研究では、社交不安と解釈バイアスの関連性について検証を行う。

方法 関東地方の私立大学に通う大学生、大学院生 243 名を調査対象とし、質問紙調査を実施した。このうち、記入漏れのあった回答を除外した 209 名 (男性 82 名、女性 126 名、不明 1 名；平均年齢 21.16 歳、SD=3.77) を分析対象とした。

### 調査材料

(1) Short Fear of Negative Evaluation scale (以下、SFNE) (笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004) (2) 日本語版 Social Interaction Anxiety Scale (以下、SIAS) (金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004) (3) 自己評定式抑うつ尺度 (以下、SDS) (福田・小林, 1973) (4) 自己注目場面想定法質問紙 (守谷・佐々木・丹野, 2007) (5) Self-Focused Attention Scale 日本語版 (以下、SFA) (Noda et al., 2021)

### 倫理的配慮

質問紙調査の際には調査用紙を配布した後に、文章および口頭にて、個人の情報が漏れないこと、匿名化された形で分析及び成果の公表を行うこと、調査の回答は任意であり、無条件に回答を中断できること説明したうえで、調査協力の同意が得られた者に回答を求めた。本研究は、武蔵野大学人間科学部研究倫理委員会の承認を得て実施された (承認番号: 201907)。

結果 まず、各尺度間の関係を検討するため、相関係数を算出した。その結果、社交不安の認知的側面を測定する尺度である SFNE と SIAS、SFNE と SFA、SIAS と SFA の間に中程度の正の相関関係があることが示された ( $r=.47, p<.01$ ;  $r=.52, p<.01$ ;  $r=.60, p<.01$ )。また、解釈バイアスと各尺度間では、SIAS と対人場面の肯定的解釈に中程度の負の相関関係があることが示された ( $r=-.36, p<.01$ )。また、SFNE、SIAS、SFA と対人場面の否定的解釈に中程度の正の相関関係があることが示された ( $r=.37, p<.01$ ;  $r=.40, p<.01$ ;  $r=.35, p<.01$ )。

## 研究3-1 社交不安症患者におけるビデオ映像に関する認知と認知行動的要因との関係性

研究1と研究2の基礎的検討を踏まえ、社交不安症患者においてVIQで測定されるビデオ映像に対する認知がどのように心理的側面と関与するのかについて、検討を行うことが必要であると考えられた。そこで、研究3-1においては、質問紙調査により社交不安症患者のビデオ映像に対する認知と認知バイアスや社交不安症状との関係性を検討することとした。また、研究3-2においては、社交不安症患者を対象に、ビデオ映像に対する認知の変容を目的として、ビデオフィードバックを集中的に行うセッションを取り入れた認知行動療法プログラムを実施することとした。

### 倫理的配慮

質問紙調査の際には調査用紙を配布した後に、文章および口頭にて、個人の情報が漏れないこと、匿名化された形で分析及び成果の公表を行うこと、調査の回答は任意であり、無条件に回答を中断できること説明したうえで、調査協力の同意が得られた者に回答を求めた。研究3-1および3-2は、武蔵野大学人間科学部研究倫理委員会の承認を得て実施された (承認番号: 29037) 対象者

Web リサーチの委託会社を通じて、SADの診断を受けた外来患者 309 名を対象とした (平均年齢 43.03 歳、SD=10.19、男性 121 名、女性 188 名)。

調査材料: (1) ~ (5) は全て、研究1・2で使用した尺度と同様である。

(1) Short Fear of Negative Evaluation scale (笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004) (2) Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版 (朝倉ほか 2002) (3) SDS (福田・小林, 1973) (4) The Video Interpretation Questionnaire (城月, 2013) (5) Self-Focused Attention Scale 日本語版 (以下、SFA) (野田・大川・城月・笹川, 2018) (6) Social Cost and Probability Scale (城月・野村, 2010)

### 結果および考察

VIQと各指標の相関係数を算出したところ、VIQ-Nは各尺度と中程度の有意な正の相関係数が認められた。また、VIQ-Pについてはおおむね有意な中程度の正の相関係数が認められた、SFAとVIQ-Pについては、弱い有意な正の相関係数が認められた。これらについて、Table 2に示す。これらの結果、VIQ-NやVIQ-Pについては、研究1で認められた社交不安症状との相関係数よりも、全体に高い値が認められた。そのため、SAD患者においては、ビデオ映像に対する認知の強さがより顕著である可能性が示唆された。

Table 2 各尺度間の相関係数

VIQN	VIQP	LSAS	COST	Probability	SFNE	SDS
------	------	------	------	-------------	------	-----

VIQP	-.507**	--							
LSAS	.514**	-.306**	--						
COST	.658**	-.366**	.684**	--					
Probability	.671**	-.429**	.674**	.896**	--				
SFNE	.463**	-.319**	.349**	.483**	.460**	--			
SDS	.486**	-.402**	.488**	.502**	.539**	.336**	--		
SFA	.488**	-.184**	.372**	.460**	.484**	.424**	.333**	--	

### 研究 3-2 社交不安症患者に対する集中的ビデオフィードバック認知行動療法プログラムの効果検討

これまでの研究の検討を踏まえ、外来の SAD 患者を対象に、集中的ビデオフィードバック認知行動療法プログラムを実施した。認知行動療法プログラムは 8 回で構成され、原則 1 ~ 2 週間に一回実施された。プログラムの内容は、心理教育、エクスポージャー、ビデオフィードバック、認知的再体制下で構成された・ビデオフィードバックについては、4・5・6 回目のセッションで実施され、3 ~ 6 回目のセッションでスピーチ場面のエクスポージャーが取り入れられた。ビデオフィードバックのセッションにおいては、この課題についての視聴を行い、自己のパフォーマンスの評価について、客観的な評価を促した。なお、参加者は、主治医の許可があり、事前のインフォームドコンセントにおいて参加の同意が得られたもののみ参加した。プログラム中は、主治医が心身のフォローを行った。プログラムは、医療機関内において個人療法で実施された。

#### 方法

インフォームドコンセントのセッションの後、社交不安症患者 12 名が本プログラムに参加した。1 名が都合により通院が難しくなり、中断となった。そのためプログラムを完遂した 11 名（平均年齢 33.91 歳，SD=10.54；男性 4 名，女性 7 名）を分析対象とした。欠損値のある指標については、平均値代入法が用いられた。また、比較対照群としてプログラム実施期間と同様の期間をあけて、同人数の 11 名（平均年齢 45.91 歳，SD=10.92；男性 6 名，女性 5 名）について質問紙調査のみを実施し、コントロール群とした。比較対照群は、質問紙調査のみを Web 調査にて行った。

調査材料：以下は全てこれまで使用した尺度と同様の尺度である。

( 1 ) Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版(朝倉・井上・佐々木 2002) ( 2 ) Social Cost and Probability Scale(城月・野村, 2010) ( 3 ) Short Fear of Negative Evaluation scale ( 笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004 ) ( 4 ) The Video Interpretation Questionnaire ( 城月, 2013 )

結果 2 要因の分析の結果、LSAS について有意な交互作用が認められた。また、SCOP-COST, SCOP-Probability, SFNE, などの指標についても、同様に有意な交互作用が認められた。ビデオ映像に対する認知については、VIQ-N および VIQ-P についても同様に有意な交互作用が認められた。これらの結果について、記述統計量とともに、Table 7 に示す。

Table 7

認知行動療法プログラムによる各尺度の変化

	Pre				Post				F-values		
	CBT Group		Control Group		CBT Group		Control Group		Interaction		$\eta^2$
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	p		
LSAS	74.55	27.99	98.27	25.72	63.33	23.62	118.27	21.77	9.30	0.01	0.32
COST	41.55	7.83	33.45	8.14	37.78	7.78	38.55	6.02	6.32	0.02	0.24
Probability	39.82	6.78	34.09	6.36	36.00	8.76	39.18	7.26	5.23	0.03	0.21
SFNE	51.00	7.67	9.30	9.29	43.67	8.15	44.27	11.65	5.57	0.03	0.22
VIQ-N	18.91	4.01	12.09	3.59	12.30	4.71	16.64	5.92	14.72	0.00	0.42
VIQ-P	8.73	3.04	8.09	2.12	13.20	4.51	8.91	2.07	5.41	0.03	0.21

総合考察 本研究では、SAD におけるビデオフィードバックの妨害要因であるビデオ映像への解釈に着目して研究を進めた。質問紙研究においては、VIQ-Negative と VIQ-Positive の要素が確認

され、社交不安症状との関連が認められた。これらの結果では、VIQ-Negativeのほうが社交不安症状との関連が強く、ネガティブな解釈についての変容を進めることが効果的であると考えられた。また、社交不安においては自己注目や解釈バイアスとの関係も強いことが示されたため、これらの要素を踏まえた検討も必要であることが示唆された。研究3においては、SAD患者を対象とした質問紙研究と介入研究を実施した。質問紙研究においては、研究1と2で扱われた要素を取り入れ、各要因の関係性について検討を行った。その結果、VIQ-NやVIQ-Pは社交不安症状やそれに関与する認知的要因との関与が認められ、症状の維持に関与している可能性が示唆された。これらの関連は、大学生を対象とした調査よりも強いものであり、疾患レベルの認知はより強固になる可能性が認められたと考えられる。また、本研究で実施した認知行動療法プログラムの結果からは、LSASで評価される社交不安や、SFNE、SCOPといった主要な認知的変数の低減も認められた。また、ビデオフィードバックの集中的な実施により、VIQの変容も確認された。これらの結果は、ビデオ映像に関する認知の変容が社交不安症状の改善に関与している可能性を示唆する結果であり、SADの治療において、ビデオ映像に対する認知を考慮した心理学的介入の重要性が指摘できる。本研究の実施では、世界的に流行したCOVID-19の影響があった。COVID-19に伴い、対面での心理療法実施について一定の制約が生じ、本研究で計画の遂行に影響があった。現段階においても、対人交流について制限があり、対面で実施する認知行動療法については、従来とは異なる実施を余儀なくされる部分がある。対象者の確保においても困難な面があったことから、これらの点を解消したうえで研究の進展がなされることが期待される。

#### 引用文献

- 朝倉聡・井上誠士郎・佐々木史・佐々木幸哉・北川信樹・井上猛・傳田健三・伊藤ますみ・松原良次・小山司(2002). Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS)日本語版の信頼性および妥当性の検討 精神医学, 44, 1077-1084.
- Clark, D. M., & Wells, A. A. (1995). Cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment* (pp. 69-93). New York: Guilford Press.
- 福田一彦・小林重雄(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- Hofmann, S. G., & Otto, M. W. (2008). *Cognitive behavior therapy for social anxiety disorder: Evidence-based and disorder-specific treatment techniques (practical guidebooks series)*. New York: Routledge, Taylor & Francis Group.
- 金井嘉宏・笹川智子・陳峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の作成 心身医学, 44, 841-850.
- 前田 香・関口 真有・堀内 聡・Weeks, J. W.・坂野雄二 (2015). Fear of Positive Evaluation Scale 日本語版の信頼性と妥当性の検討 不安症研究, 6, 113-120.
- 守谷 順・佐々木 淳・丹野義彦(2007). 対人場面における対人不安の否定的な判断・解釈バイアスと自己注目との関連 パーソナリティ研究, 15, 171-182.
- Noda, S., Okawa, S., Shirotaki, K., Sasagawa, T., & Bögels, S. M. (2021). The Japanese self-focused attention scale: Factor structure, internal consistency, convergent and discriminant validity. *Journal of Clinical Psychology*. <https://doi.org/10.1002/jclp.23133>
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 741-756.
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 泰子・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度(FNE)短縮版作成の試み：項目反応理論による検討 行動療法研究, 30, 87-98.
- Shirotaki, K., Kodama, Y., & Nomura, S. 2014 The preliminary study of individual cognitive behavior therapy for Japanese patients with social anxiety disorder. *Psychological Services*, 11, 162-170.
- 城月健太郎・笹川智子・野村忍 2009 スピーチに関する見積もりが社会不安に与える影響 心理学研究, 79, 490 - 497.
- 城月健太郎・野村忍 (2009). Social Cost / Probability Scale の開発— Cost / Probability bias が社会不安に与える影響— 心身医学, 49, 143-152.
- 城月 健太郎 (2013). ビデオ映像に対するネガティブな解釈およびポジティブな解釈と社交不安の関係 武蔵野大学心理臨床センター紀要, 13, 1-9.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 城月健太郎	4. 巻 40
2. 論文標題 不安・不安症（特集 コロナ禍の今だから知っておきたい ころの不調：患者さんも あなたも）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊ナーシング	6. 最初と最後の頁 20-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kentaro Shirotuki, Shuhei Izawa, Nagisa Sugaya, Kenta Kimura, Namiko Ogawa, Kosuke Chris Yamada, Yuichiro Nagano	4. 巻 27
2. 論文標題 Imbalance between salivary cortisol and DHEA responses is associated with social cost and self-perception to social evaluative threat in Japanese healthy young adults	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Behavioral Medicine	6. 最初と最後の頁 316 - 324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12529-019-09835-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野田昇太, 城月健太郎, 中尾睦宏	4. 巻 2
2. 論文標題 Mindfulness and cognitive behavioral therapy for social anxiety (4回プログラム) の開発とその展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野大学認知行動療法研究誌	6. 最初と最後の頁 36 - 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/jc1p.23133	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Shirotuki Kentaro, Uehara Saki, Adachi Shohei, Nakao Mutsuhiro	4. 巻 1
2. 論文標題 Internet-Based Cognitive Behavior Therapy for Stress and Anxiety among Young Japanese Adults: A Preliminary Study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psych	6. 最初と最後の頁 353 ~ 363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/psych1010025	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 城月健太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 社交不安症の認知行動療法の展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 武蔵野大学認知行動療法研究誌	6. 最初と最後の頁 12-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 城月健太郎・川副暢子・児玉芳夫・足立總一郎・塩入俊樹	4. 巻 11
2. 論文標題 社交不安症患者におけるスピーチ場面のコストバイアスが不安感情と自己評価に与える影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 187-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊美紀子・城月健太郎	4. 巻 8
2. 論文標題 ビデオ映像に関する解釈尺度の信頼性妥当性の再検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 武蔵野大学人間科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 野田昇太・大川翔・城月健太郎	4. 巻 2
2. 論文標題 マインドフルネス特性、注意制御機能回避行動、他者からの評価に対する恐れと社交不安との関連性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 マインドフルネス研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Shirotsuki, K, Kodama, Y, Noda, S, &, Nakao, M
2. 発表標題 The effects of changing cost bias in cognitive behavior therapy programs for Japanese patients with social anxiety disorder
3. 学会等名 The 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Watanabe, M, Shirotsuki, K
2. 発表標題 The relationship between the negative and positive interpretation of self perception and social anxiety
3. 学会等名 The 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noda, S, Tomiyama, S, Nakao, M, Shirotsuki, K
2. 発表標題 Mindfulness and cognitive behavioral therapy for social anxiety: a pilot study of university students
3. 学会等名 The 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 城月健太郎
2. 発表標題 社交不安症患者におけるスピーチ場面のコストバイアスが不安感情と自己評価に与える影響
3. 学会等名 第6回 認知療法研究 最優秀論文賞 受賞記念講演 (招待講演)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 城月健太郎・児玉芳夫・中尾睦宏
2. 発表標題 社交不安症に対する個人認知行動療法プログラムと 自己評価の変容
3. 学会等名 第25回日本行動医学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野田昇太・大川 翔・城月健太郎・笹川智子
2. 発表標題 マインドフルネス特性が社交不安症状に影響を及ぼすプロセス ~ 自己注目を媒介要因として ~
3. 学会等名 第25回日本行動医学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大川翔・城月健太郎・笹川智子・清水栄司
2. 発表標題 社交不安, 評価に対する恐れ, ポジティブな社会的出来事の否認の関連
3. 学会等名 第44回日本認知・行動療法学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野田昇太・大川翔・城月健太郎・笹川智子
2. 発表標題 Self-Focused Attention Scale (SFA) 日本語版の開発
3. 学会等名 第44回日本認知・行動療法学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 押山千秋・清水栄司・倉田由美子・浦尾悠子・城月健太郎・佐々木和義
2. 発表標題 うつ・不安予防のための心と脳の健康づくりの試み
3. 学会等名 第30回日本健康心理学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大川翔・野田昇太・城月健太郎
2. 発表標題 大川翔・野田昇太・城月健太郎 (2017). マインドフルネス特性と抑うつおよび社交不安とその維持要因の関係性
3. 学会等名 第17回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 城月健太郎、大川翔、野田昇太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武蔵野大学出版会	5. 総ページ数 148
3. 書名 社交不安症の基礎理解と認知行動療法	

1. 著者名 Kentaro Shirotaki・Shota Noda	4. 発行年 2018年
2. 出版社 IntechOpen	5. 総ページ数 127
3. 書名 Anxiety Disorders - From Childhood to Adulthood(担当:共著, 範囲:Cognitive Behavior Therapy and Mindfulness-Based Intervention for Social Anxiety Disorder)	

1. 著者名 Kentaro Shirotuki	4. 発行年 2017年
2. 出版社 IntechOpen	5. 総ページ数 12
3. 書名 Video Feedback Techniques Used in Social Anxiety Disorders (In "Cognitive Behavioral Therapy and Clinical Applications")	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	中尾 睦宏  (Nakao Mutsuhiro)  (80282614)	国際医療福祉大学・医学部・教授    (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------